

## 宇治の浮舟・白河の寢覚

——『夜の寢覚』の挑発と存亡・序章 その(一)——

久下 裕利

物語作家として第二の紫式部たらんことを自認する菅原孝標女の物語創作が、『更級日記』の中で「ひかるの源氏の夕顔、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめ」とする構図を無にすることはなかったであろう。

また一方で、紫式部が初お目見えの時中宮彰子が十七歳であったのに対して、三歳の祐子内親王家への初宮仕えが物語作家としての役割とは無縁な状況であつたらしいことが孝標女に戸惑いを感じさせたに違いなからう。

### 一 はじめに

物語は恋愛の舞台となる地を、そのイメージの喚起するものも踏まえて慎重に設営するはずである。

特に『源氏物語』の場合、正篇の夕霧巻で一条御息所・落葉の宮母娘の隠棲地として選ばれた小野（比叡山の西北、愛宕郡）は、惟喬親王、紀貫之、藤原敦忠などの著名な平安貴紳・歌人たちが山荘を営む地として知られ、

優雅な情趣が漂う中にも一抹の哀れさがまとわりつく空間として形成されていた。

一方、続篇の宇治は、京から遠く離れた地を恋の主要舞台に設営するという大胆な試みが、正篇に小野があつたからとはいへ容易な選択ではなかつたかと思われるが、喜撰法師の『古今集』所載歌として喧伝される「わが庵は都の辰巳たつみしかぞ住む世を宇治山うぢと人はいふなり」（巻十八、雑下、九八三）によって、宇治を「憂し」とする背景をいやがうえにも植えつけられるイメージに固執する空間形成となつていたようだ。<sup>注(1)</sup>

それがまた立太子争いに巻き込まれた苦い経験をもつ八の宮造型に関わつて、京という権力闘争の場から遠隔の地に住まう身の安堵と表裏して、やはり『古今集』歌として埋没しかねない橋姫伝説注(2)に根差すかのような二人の若い姫君たちをもつ父としてなかなか世俗的執着から解放たれない精神を象る俗聖の所在なさを象徴しかねない隠棲地としてはいわば中途半端な空間形成を余儀なくされている〈地〉として、宇治川の瀬々は荒々しくとも、宇治は最も適しかつた居住空間だったのかもしれないのである。

しかし、一転してその父八の宮に見捨てられていた浮舟の登場（宇治十帖の初期構想に浮舟が含まれていたのかいないのかという議論がある）となると、

宇治という〈地〉は反転して浮舟を襲い「憂し」を抱え込まざるを得なくなってしまう宿運にさらされていく。

もとより正篇第二部（柏木・女三の宮密通事件）から引き継いだ出生の秘密という内面に憂愁を抱える男主人公薫を宇治にむかわせるための新たな造型であった八の宮一族やその亡き大君の形代となる浮舟を設定したことになるが、とりわけ本居宣長『源氏物語玉の小櫛』が八の宮の準拠に惟喬親王を指摘したように、王権の問題とも絡みつつ、在原業平の如く吸い寄せられる磁場が薫にとって古色めいた〈宇治〉であったところに作者は拘泥することになる。<sup>注(3)</sup>

本稿はそうした〈宇治〉のイメージ性を背景とする歴史的な〈地〉と物語の主人公との関わりを見つめ直していくとともに、後期物語ゆえにか、それとも現存巻五以降の散佚欠巻部に位置するゆえにか『夜の寝覚』における白河設定がまだ重要な背景として理合されずにいるが、白河における寝覚の上の状況は、宇治における浮舟に対照せられるべく機能しているのではないかと思われる点について述べることにする。

ひとまず宇治の地が、平安貴人とりわけ藤原撰家（道長が『源氏物語』の制作依頼主）にとって、どのような〈地〉としてあったのか、それがなぜ恋の争奪物語の舞台としての〈宇治〉へつながっていくのか、そうした点から物語を支える背景を探り、そこから『夜の寝覚』の作者である菅原孝標女の物語創作がいかなる意図があって宇治ではなく白河（志賀の山越えの谷間に源を発して鴨川に注ぐ川。またその辺り一帯の地名）を設営したのかを考えようとするものである。

繰り返すが、本稿はその基点とすべき〈宇治〉という地と、その認知度は比較的低い撰家が代々受け継いでいる藤原良房の別宅があった〈白

河〉とを対置して、その資料が示す基本点の確認を通して、『源氏物語』における〈宇治〉と、『夜の寝覚』における〈白河〉とを、主題性を担う女主人公たちが一時的な居所となし得た、その恋の物語展開で重要な舞台装置ないし背景に据えた作者の意図を考えてみようとするものである。

## 二 なぜ宇治なのか

懐妊により中宮定子が前中宮大進であった平生昌宅に出御（『枕草子』）するという歴史的事象とともに宇治が急浮上するのは長保元（九八）年八月九日のことであった。実資の『小右記』と行成の『権記』がともに伝えるところによれば、行啓に供奉する上卿がないという支障が出来たのである。

蔵人頭行成が勅命を受けて、慌ただしく対応している様が『権記』に記されている。また太皇太后宮大夫実資も急きよ参入したが、結局は病悩や物忌を口実にしていた中納言時光がその役を担当することになった。

この失態は左大臣道長が右大将道綱や宰相中将齊信らを引き連れて宇治に遊覧に出かけたためであったようで、『小右記』には「似妨行啓事、上達部有所憚不参内敷」と記して、道長の妨害工作との認識を示す。さらに「向宇治家」以下の割注には「自六條左府後家手、買領處也」ともあって、故源重信の後家（師輔女）からこの宇治の別宅を買い取った事情が知られる。<sup>注(4)</sup>これが後に頼通に伝領され、平等院となる。以後、道長が寛弘以降には度々宇治を訪れたことは自らの手による『御堂関白記』（大日本古記録）に以下の如く記されることから明らかである。<sup>注(5)</sup>

寛弘元（一〇四）年

○閏九月二十一日 早行宇治、乗舟、同道右衛門督・勘解由長官・右大弁、於舟中有連句、着家有題、於宇治別業即事、以言作序、

（意訳―早いうちに宇治に行った。舟に乗った。同行したのは右衛門督齊信・勘解由長官有国・右大弁行成であった。舟中において連句を作った。別業に着いてから、詩題が出た。宇治の別業において詩を作った。文章博士大江以言が序を作った。）

○閏九月二十二日 午時許読文、乗舟還、宇治水極少、依之則忠宅許乗之、古老云、未有如此事云々、渡馬不及下腹、見奇事不少、亥了許到京、

（意訳―午刻の頃に作った詩を読み上げた。舟に乗って還ろうとしたところ、宇治川の水が極めて少なかった。よって源則忠の家の辺りで舟に乗った。古老が言うには「未だこのような事はありません」と。そこで馬を渡してみると、川水は下腹に及ばなかった。見るにつけ奇妙な事が少なくなかった。亥刻の終わる頃に京に到着した。）

○閏九月二十五日 従中務宮、賜右大弁許宇治作文余詩和、

（意訳―中務宮具平親王から、右大弁行成を介して先日の宇治の作文会での私の詩に和した詩を賜った。）

寛弘二（一〇五）年

○十月九日 至木幡寺、後行宇治、

（意訳―木幡寺に到った。後に宇治に行った。）

寛弘七（一〇〇）年

○六月十六日 早朝行宇治、夜還来、

（意訳―早朝宇治に行った。夜還って来た。）

長和二（一〇三）年

○十月三日 与春宮大夫・太皇太后宮大夫同車、行大井、先之権大納言行向、一件大納言日來觸未来、人々云、此次行宇治成云々、

（意訳―春宮大夫齊信と太皇太后宮公任と同車して、大井に行った。大井から先は権大納言頼通も同行した。この権大納言は、何日か触穢であったので、来られなかった。人々が言うには、「この次は宇治へ行くことに決まりました」と。）

○十月六日 辰時行宇治、同道人々自道出会、是前定也、於賀茂河尻乗舟、戌時許至着、舟中管絃・聯句・和歌有其数、出題初作文事、江山属一家、以情為韻、春宮大夫・大皇太后宮大夫・皇太后宮大夫・侍従中納言・左衛門督・左右宰相・二位中将・左大弁・殿上人十余人、権大納言別船相具、是依觸穢也、

（意訳―辰刻に、宇治に行った。同行の人々とは、道で落ち合った。これは先日の決定によったものである。賀茂の河尻で舟に乗った。戌刻の頃、宇治に到着した。舟中において、管絃・連句・和歌が、数々行なわれた。題を出し、作文を始めた。題は「江山は一家に属す」であり、情を韻とした。参会者は、春宮大夫齊信・太皇太后宮大夫公任・皇太后宮大夫源俊賢・侍従中納言行成・左衛門督教通・左右宰相中将源経房・藤原兼隆・二位中将頼宗・左大弁源道方・殿上人十余人であった。権大納言頼通は別の船に乗って伴ってきた。これは触穢によるためである。）

長和四（一〇五）年

○二月二十三日 従大納言頼通行宇治、

（意訳―大納言頼通の家高倉第から宇治に行った。）

○三月十六日 到宇治、定行幸間道雑事、雨降、帰来用馬、入夜帰、待月也、

（意訳―宇治に到った。春日神社行幸のための道の雑事を定めた。雨が降った。帰路は馬を用いた。夜に入ってから帰った。月を待ったのである。）

○八月六日 行宇治、入夜帰来、従舟帰、今夜通夜雨下、

（意訳―宇治に行った。夜に入ってから帰って来た。舟に乗って帰った。今夜は夜通し雨が降った。）

○十月十二日 早朝行宇治、上達部八九人許同道、從舟道歸來、亥時許、月甚以清明、舟中有和歌事、

(意訳―早朝宇治に行った。上達部八九人ばかりが同道した。舟に乗って帰って来た。亥刻の頃、月が甚だ清明であったから、舟中で和歌を詠んだ。)

寛仁元(一〇二七)年

○八月二十八日 行宇治家、從路間小雨降、入夜大雨、

(意訳―宇治の別業に行った。その途上で小雨が降った。夜に入って大雨となった。)

○八月三十日 從宇治歸間、淨妙寺南方惟任來向、是為撰政使、有書、除目案内也、即於途中送返事、依車路可遲也、

(意訳―宇治から歸る途上、淨妙寺の南方で藤原惟任がやって来た。これは撰政頼通の使で、書状があった。除目に関する承認であった。すぐに帰路の途中において返事を送った。車路では帰京が遅くなるからである。)

○十月二十五日 早朝行宇治、女方相具、与按察同舟、見紅葉、此間有聯句、

還來与納言一兩作文、

(意訳―早朝宇治に行った。女方倫子をともなった。按察大納言齊信と同舟であった。紅葉を見に出かけた。この時、連句を詠んだ。別業に還って来て按察大納言と一つずつ詩を作った。)

○十月二十六日 申時許乘舟還來、依方忌留賀茂辺、

(意訳―申刻の頃、舟に乗って還って来た。方忌だったので賀茂河尻辺りに留った。)

寛仁二(一〇二八)年

○九月二十六日 行宇治、乘舟、所出題傍水多紅葉、入夜至着、

(意訳―宇治に行った。舟に乗った。出した題は「傍水に紅葉多し」であった。夜に入って到着した。)

○九月二十七日 通夜雨下、從辰時天晴、晚景乘舟歸着今津、講文、

(意訳―夜通し雨が降った。辰刻から天が晴れた。晚方舟に乗って今津に歸着し、詩を披講した。)

寛弘元(一〇〇四)年閏九月と長和二(一〇三三)年十月の宇治別業において盛大な作文会が行なわれたことが知られる。<sup>注(6)</sup>これらの詩作は『本朝麗藻』

(巻下「山庄部」)にも記され、前述のような特別な政治的意図はなく遊興を目的としたもので、季節柄晩秋の紅葉を楽しむ趣向の中での作詠であったのだろう。

特に前者の作文会では二十五日には道長の詩に和した中務宮具平親王から行成を介して詩が贈られたことは注視されてよい出来事<sup>注(7)</sup>、後年の具平親王の娘隆姫と道長の嫡男頼通との結婚が、両家の没交渉から招来された政略結婚めいた仕儀ではなさそうな点や、正式な結婚の打診であれば、行成を介する可能性が両家にとって適しいことからしても、寛弘五(一〇〇八)年のこととして『紫式部日記』に見える道長の紫式部への相談事がこの結婚の内々の事情に関わる件であらうとの推察は、ほぼ正しい道筋だったといえよう。<sup>注(8)</sup>

さらに寛弘元(一〇〇四)年閏九月二十二日の宇治での作文会とは別に、二十三日には道長が、入宋した寂照(大江定基)上人の旧房に帥伊周が到って作った詩に和して伊周に届けている。また二十六日には道長の詩に和した一条天皇の御製を賜り、伊周からも道長に和した詩が届けられている。<sup>注(9)</sup>

当時は伊周復権の途上にある時期で、詩作を通しての表面上の伊周との交流再開は、故定子所生の敦康親王を抱える道長方にとって、微妙なバランス感覚を強いられていた。伊周には寛弘二(一〇〇五)年二月二十五日に、その座次を「大臣の下、大納言の上」(儀同三司≡准大臣)に列する宣旨が

下り『御堂関白記』同日条、同年三月二十六日に昇殿が聴された。そして同月二十九日には、左大臣道長主催の作文会に参列するまでになる。長徳二(九〇)年正月の花山院不敬放射事件以来、実に九年ほどの歳月が経っていた。

ところで、伊周にも宇治川で遊覧した折の詩句が『本朝麗藻』(巻下)59「与諸文友泛<sub>二</sub>松於宇治川、聯以逍遙」にあり、その「林南ノ柳樹ハ將軍ノ宅」に対する自注に「深草ノ西岸ニ一田墟アリ」とし、またその下句「橋北ノ稻花ハ帝王ノ田」には「宇治院ノ台榭ハ已ニ毀ツ、只田ヲ点ズル有リ」と注する。多少誇張された詩作の視界とも言えなくはないが、これに従えば、宇治周辺一帯は廃墟と化した邸宅が点在する田園風景が広がっていたらしい。もちろん道長が故重信邸を買取後は、その周辺から整備されていったと推察される。

寛弘年間以降とはいえ『源氏物語』宇治十帖の成立年時を寛弘七(一〇二〇)年と考えれば、道長により繰り返される宇治遊覧の事蹟といっても、それは『御堂関白記』の記事からは寛弘元(一〇四)年にほぼ限られるが、<sup>(注10)</sup> 椎本巻における初瀬詣の帰路に匂宮一行をむかえる夕霧の宇治別荘を「六条院より伝はりて、右大殿しりたまふ所は、川よりをちにいと広くおもしろくてあるに、御設けせさせたまへり。」(小学館『新編全集』⑤一六九頁)と設定する由因となった可能性がみえてこよう。「川よりをちに」とは宇治川の西岸と判断されるから、八の宮邸は京都側で対岸となる。

また、浮舟がやはり初瀬詣の帰途の横川僧都一行に救助された「故朱雀院の御領にて宇治院といひし所」(⑥二八〇頁)の「宇治院」には『蜻蛉日記』の作者も中宿りした「宇治院」がまず想起され、当然準拠となるべき宇治院の存在が考えられてこよう。

この「宇治院」が、手習巻において浮舟の入水未遂で意識混濁状態から救出までが語られた経緯からすれば、その怪異現象を担<sup>(注11)</sup>う場所として正篇において夕顔を死に至らしめた廃院の準拠を源融の旧邸宅河原院を指摘できることと対照を成し、夕顔の薄命とその不安感に付帯する〈白〉のイメージを重ねる浮舟の造型に加えて、源融所有の宇治の別業らしい「宇治院」において統篇では逆に命を救われるという創意は、入水未遂後の復活再生を描く物語(正篇における光源氏の復活再生の物語に対置すべくヒロインの物語として位置づけられてくる)にとって必要な舞台装置であったということもできよう。

〈宇治〉という磁場が、宇治十帖の主要人物たちにとって各様の思念を託す地であって、父八の宮の遺訓を遵守する大君と離反する中の君の対照を描いた物語が、その父宮の遺訓の埒外にいた宮の落胤浮舟にとっての〈宇治〉をどう導いたのか。その始まりは東屋巻において匂宮の魔の手からひとまず逃れていた三条辺りの隠れ家を突如訪れる薫によって切り拓かれていた。

この訪問とそこからの連れ出しが、女君の運命を激変させた夕顔巻での某院への夕顔の連れ出しや若紫巻での二条院への藤壺の宮の面影を宿す紫の上略取の状況といっけん似てはいても、宇治の新たな寝殿の造成確認という周到な準備の上に、弁の尼を仲介に浮舟の隠れ家を探る計画性は万全であり、薫としては異例な実行力を発揮していた。しかも従前、女君に対しては同意を得ない理不尽な行為を慎んでいたにも拘わらず、うむを言わず牛車に「かき抱きて乗せたまひつ」(⑥九三頁)とするのは、浮舟の人数にも入らぬ身分を侮っての行為ともあながち見られまい。

では薫のこのような行動原理が何によっていたのか。もちろん亡き大君

の形代を得んがための条理を逸した行動とも考えられようが、それにしても初めて間近で一晩をとくに過ごしたはずの浮舟の容貌や人柄への言及が具体的に語られることはいっさいなく、その全てを宇治への道中や到着後に、大君と比べてその「ただいとおつまつましげにて、ひたみちに恥ぢたる」(⑥九九頁)物足りなさや無教養な浮舟が露呈され、薫にとって亡き大君の身代わりとして充足し得ない存在であることが明らかにされている。つまり、この〈宇治〉への連れ出し略取が、浮舟を〈宇治〉に置くための目的であったことが了解されてこよう。

今上帝女二の宮を正室とする権大納言兼右大将の薫が世間体を気にして次のように当分の間の浮舟への対処を決めていた。

かつは、この人をいかにもてなしてあらせむとすらん、ただ今、ものものしげにてかの宮(薫の自邸、三条宮―久下注)に迎へ据ゑんも音聞き便なかるべし、さりとして、これかれある列にて、おほぞうにまじらはせんは本意なからむ、しばし、ここに隠してあらん、と思ふも、見ずはさうさうしかるべくあはれにおぼえたまへば、おろかならず語らひ暮らしたまふ。

(⑥九八―九九頁。傍線久下)

並の召人とは異なる大君の形代としての浮舟の対処に苦慮する薫だが、〈宇治〉への連れ出しが極めて計画的だっただけに、それに反して将来を見通せない二人の関係はお粗末な認識結果と言うべきで、ここに〈宇治〉に隠し据えられる女君が誕生する。<sup>注(13)</sup>

それは言わば〈宇治〉に憂き体現者の不在を埋めるために呼び込まれてきたともいえ、新たに造成した六条院に「すき者どもの心尽くさするくさはひ」(玉鬘巻)として呼び入れた玉鬘の如くで、そこには当然「あるま

じきりまで尋ねさせたまふ」「あだなる御本性」(浮舟巻)の匂宮が介入してくる必然性が敷設されていた。玉鬘求婚譚では石山の霊験によって鬚黒が玉鬘をかすめ取るが、浮舟の場合は初瀬(長谷寺)の霊験(権本巻冒頭)による匂宮がその存在を脅やかすことになる。<sup>注(14)</sup>

しかし、物語は東屋巻巻末に浮舟の本質的な存在の不安定さを既に用意していた。「白い扇をまさぐりつつ添ひ臥したる」(⑥一〇〇頁)浮舟に、琴を弾きさせた薫は、「楚王の台の上の夜の琴の声」とふと口ずさむが、これは『和漢朗詠集』にある「班女閨中秋扇色 楚王台上夜琴声」の第一句を想起させ、それは漢の成帝の愛妃班婕妤が他の妃に帝寵を奪われ、その身を夏の白い扇が秋になって捨てられるのに喩えて嘆いた故事であって、将来の二人の関係を不安視できる詩句であった。それは、夕顔巻では「長生殿の古き例はゆゆしくて」(①一五八頁)とあったように、唐の玄宗皇帝が楊貴妃に愛を誓った故事(長恨歌)が引き合いに出されて、死の予告として文脈に刻まれていた。

夕顔巻の場面は八月十五夜も明け方近くであったが、東屋巻は九月十三日の月の夜で、夕顔の血を受け継ぐ子玉鬘ではない浮舟が、こうまで執拗に夕顔化していくのか。この班女の不吉な詩句ゆえ、『新編全集』頭注は「彼らの仲が不幸な宿世を決定づけられているからであろう。」(⑥一〇二頁)とする。

その証しに東屋巻巻末に据え置かれた薫の一首「里の名もむかしながらに見し人のおもがはりせるねやの月かげ」(⑥一〇一頁)は、〈宇治〉という憂き里に新たにもう一人の女人が加わったことを月下に照らし出していた。薫は浮舟を〈宇治〉に幽閉したのであった。

### 三 なぜ白河なのか

『源氏物語』に寄り添うような『夜の寝覚』の発端部をはじめとする類似点に関しては次稿に譲るが、このような現象は、『源氏物語』が全知的体系として作者の身近に存在していた証しであるとともに、ことさらめいた『源氏』撰取がこの時期既に物語の方法として確立していたのだともいえよう。<sup>注(16)</sup>

であるならば、『夜の寝覚』においても主人公寝覚の上(源氏太政大臣女の中の君)の父入道が隠棲する地として嵯峨野の北西に位置する「広沢」(「西山」とも)があり、そこは寝覚の上が困難に直面した時に身を寄せる地であり、しかも癒される聖地となっていて、<sup>注(17)</sup>それを宗教性のある隠棲地だからといって宇治と同一視し、置き換え可能という論理が成り立つのかといえ、そうはなし得ないであろう。<sup>注(18)</sup>

ついでに孝標女のもう一つの現存物語である『浜松中納言物語』では主人公中納言が吉野山に隠棲する唐后の母である吉野尼君を訪れるが、そこで唐后に似る父親違いの同腹の妹吉野姫君に巡り合うことになるのは、『源氏』で言えば藤壺の宮の面影を宿す紫君と出会う北山(若紫卷)が相当しよう。

つまり『寝覚』『浜松』両物語の人物造型や場面設定に『源氏』の撰取が濃密とはいえず、主人公女大將が出産のため身を隠すことになる宇治を設置する『今とりかへばや』とは違って、容易に宇治を選ばない。作者孝標女の名所に対するこだわり執着があって、宇治に代わる土地として「広沢」だけにとどまらず、地理的には京を中心に東西対照の位置関係にある「白河」も設定されたと考えられる。

「白河」が『寝覚』現存巻五以後の末尾散佚欠巻部において寝覚の上が隠し据えられ、幽閉された地として急浮上したことは、昨近の新出古筆切がらみでよく周知されているはずである。<sup>注(19)</sup>

それは現存巻三において寝覚の上のもとへの闖入事件を引き起こした冷泉院(宮中での闖入時は今上帝だが、この名称を用いる)が、別業の白河の院にこんどは仮死状態となった寝覚の上を拉致してきたのである。白河の院において寝覚の上の蘇生がはかられ、健康の回復に相当の月日を要したことが察せられる。その後、寝覚の上は白河の院を脱出することとなる。以下、従来の資料及び新出の仁平道明蔵古筆切本文を念のため掲出し、白河の院に滞在する寝覚の上の姿をひとまず確認しておく。<sup>注(20)</sup>

○『後百番歌合』九番右(二二八)

白河の院にて、身の有様おぼし続ける夕暮に

しをれわび我がふるさとの萩の葉に乱ると告げよ秋の夕風

○『後百番歌合』十五番右(二三〇)

白河の院より、あながちにのがれ出で給へるを、初めて聞

かせ給ひて遣はしける御文に  
中宮

見しままの夢のうちにぞまどはるる立ち後れにし身を恨みつつ

○『風葉和歌集』(巻四、秋上、二二九)

忍びて白河の院に侍りけるに、物思ふ秋はあまたありしか

ど、いとかうはあらざりきかしとながめわびて

寝覚の広沢の准后

しをれわび我が古里の萩の葉に乱ると告げよ秋の初風

○仁平道明藏伝後光嚴院筆物語六半切

しにこしかたゆくすゑもおほえすこれを

みすてゝいなはよにいき返ながらへ給とも

我にはなけのこの葉もかけたまはし

かゝるをりたにひたふるにかきいたきて

この院にいてたてまつりていひしらぬ心を

つくして大願をたて佛を念したて

まつりしさまなと世のつねなる心さしな

りやいみしくこのよならさらむまでふかき

心さしにはまけぬへきわさなるをかはかり

仁平氏藏の『夜の寢覚』と思われる写本の断簡に「この院」(傍線)とあり、これが掲出の『後百番歌合』(『拾遺百番歌合』『風葉集』)の「白河の院」であれば、どのような経緯で寢覚の上が白河に滞在することになったのが知られ、『無名草子』に「そらじに」という、いわゆる寢覚の上の“偽死事件”とされる奇怪な事件の一部がおぼろげながら明らかになっていくのである。

そうなれば「かき抱きてこの院に率てたてまつ」った行為者が、寢覚の上に異常な恋着を抱き、執拗なストーカー行為を繰り返していた「この院」の所有者である冷泉院に他ならないことは察しがついてくる。そして、意識を失い窮地に陥っていた寢覚の上が、冷泉院により大願を立て仏に祈った結果、幸いにも生き返ったのである。その後の「白河の院」での状況が前掲資料の伝えるところとなろう。

つまり、寢覚の上の「白河の院」での滞在は何らかの事情で身を隠す

(傍点「忍びて」) 必要があったのかとも思われるが、それが「あながちのがれ出で」(傍点)る場所でもあった訳だから、寢覚の上にとっては不本意な事情で身を隠し据えられていたのだと考えられる。

また、『後百番歌合』と『風葉集』で重複する「しをれわび」歌の選出は、さらに大阪青山短期大学所蔵の伝後光嚴院筆『夜寢覚抜書』にも採歌されていて、この期間の最重要歌(但し末句は「あきのゆふかぜ」ということができようし、この資料によって「しをれわび」歌の傍点「乱る」の内実が、愛する「おさなき人」(故老関白の娘尚侍のちご宮など)への想いであったり、息子の三位中将真砂(まさこ)が母寢覚の上が世にない身と信じてしまい「山ふかくあとをたちたえこもりたる」と北山に籠居<sup>注(22)</sup>までしてしまったことを嘆き、何とか夢にでも生きていることを告げたいと思ひ乱れている期間でもあって、手紙すら書き送ることができなかった状況であったと察せられる。すなわち「白河の院」での滞在が外部との接触及び連絡が不可能な身であったことから、寢覚の上は冷泉院によって軟禁幽閉<sup>注(23)</sup>されていたと判断されるのである。

このように『寢覚』の末尾欠巻部において「白河」が重要な舞台であったことを確認した上で、物語成立当時の白河がどのような風景として史上に記録されているのかを探ると、道長が寛弘元(1004)年三月二十八日に花山院からのお召しを受けて、花見に藤原氏伝領の白河殿に赴いたことが知られるが(『御堂関白記』、道長没後(万寿四(1034)年十二月四日没)、相続した頼通が初めて訪れたのは翌年の長元元(1036)年三月二十日のことであった(『左経記』)。

以下、『日本紀略』『小右記』等には関白左大臣頼通や上東門院彰子が白河殿を頻繁に訪れた記録が残っている。<sup>注(24)</sup>

〈関白左大臣頼通の事例〉

長元二(1019)年

○四月二日「関白殿渡<sub>二</sub>白河第<sub>一</sub>事」(『小記目録』)

○五月二十八日「関白左大臣於<sub>二</sub>白河別業<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>競馬事<sub>一</sub>」(『日本紀略』)

○八月二十三日「弁(経任)云、『去多<sub>ク</sub>関白被<sub>レ</sub>向<sub>二</sub>白河<sub>一</sub>。参<sub>二</sub>彼白河<sub>一</sub>、経<sub>二</sub>内覧<sub>一</sub>之後可<sub>レ</sub>奏聞』」(『小右記』)

長元三(1020)年

○十月二日「関白左大臣移<sub>二</sub>徙白河第<sub>一</sub>」(『日本紀略』)

長元四(1021)年

○三月二十日「中納言・中将同車向<sub>二</sub>関白白川第<sub>一</sub>見<sub>レ</sub>之、太優也」(『小右記』)

長元五(1022)年

○三月十七日「関白於<sub>二</sub>白河<sub>一</sub>有<sub>二</sub>射興<sub>一</sub>事」(『小記目録』)

○十二月十一日「関白閉門。下人云、「□称堅固物忌。実者早日密<sub>レ</sub>行白河第<sub>一</sub>者」(『小右記』)

長元六(1023)年

○二月十六日「今日、関白家於<sub>二</sub>白河院<sub>一</sub>有<sub>二</sub>子日遊<sub>一</sub>」(『日本紀略』)

○三月五日「今日、関白左大臣招<sub>二</sub>卿士儒人<sub>一</sub>於<sub>二</sub>白河院<sub>一</sub>賦詩。題云、花色見難<sub>レ</sub>飽」(『日本紀略』)

長元九(1026)年

○三月八日「関白左大臣、先参<sub>二</sub>御堂薬師堂例講<sub>一</sub>。次於<sub>二</sub>白河院<sub>一</sub>召<sub>二</sub>文人<sub>一</sub>賦詩。題云、花色満<sub>二</sub>林池<sub>一</sub>。春字為<sub>レ</sub>讀<sub>二</sub>義忠朝臣所<sub>一</sub>献也。今日、於<sub>二</sub>白河第<sub>一</sub>有<sub>二</sub>蹴鞠之興。明日可<sub>レ</sub>講云、序事仰<sub>二</sub>義忠<sub>一</sub>」(『日本紀略』)

○三月九日「被講<sub>二</sub>林池之詩<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>白河殿<sub>一</sub>有<sub>二</sub>此会<sub>一</sub>」(『日本紀略』)

長曆二(1036)年

○十一月一日「即参<sub>二</sub>白河院<sub>一</sub>。而早御<sub>二</sub>座白河殿<sub>一</sub>已畢云々。仍参<sub>二</sub>白河殿<sub>一</sub>」

申<sub>二</sub>右府(実資)久下注<sub>一</sub>御復命、已有<sub>二</sub>許容<sub>一</sub>命云……」(『春記』)

〈上東門院彰子の事例〉

長元五(1022)年

○三月二日「三日、昨日、女院、遣<sub>二</sub>遥白河院<sub>一</sub>。寄<sub>二</sub>車間、雷鳴事<sub>一</sub>」(『小記目録』)

寛徳二(1045)年

○閏五月十五日「上東門院遷<sub>二</sub>御白川院<sub>一</sub>」(『扶桑略記』)

康平三(1060)年

○三月二十三日「仙院渡<sub>二</sub>御白河院<sub>一</sub>」(『定家朝臣記』)

白河にある藤原氏代々の別業の名称を『小右記』は「白河(川)第」と記すが、『日本紀略』は「白河院」「白河第」「白河殿」の三通りで一定しない。中でも「院」とあれば、皇室御領をまず考えねばならないが、皇室関係者が一時的でも滞在使用すれば、その邸第をそれに因んで呼称変化するのは慣例であったから、「白河院」の名称の根拠は、万寿三(1026)年に太皇太后宮彰子が出家し、上東門院となった彰子が寛徳二(1045)年閏五月十五日、白河の別業に移御した事に拠ると考えるのが穏当であろう。本稿では頼通の嫡子師実が白河天皇に献上以後の「白河院」の表記と區別して、頼通・彰子時代の白河の別業を「白河第(殿)」とし、特に寛徳二(1045)年における女院彰子の「白河第(殿)」への移居をもって「白河の院」との呼称表記を用いることとする。『寝覚』では冷泉院は仙洞御所の他に白河の地に別業を所有していたということになる。

白河が景勝遊覧の地として注目されたのは前掲資料からでも頼通による長元六・九（一〇三三・三）年三月の詩会の題「花色見難飽」「花色満林池」で明らかかなように桜の名所であったことに拠ろうが、長元四（一〇三三）年三月上旬には彰子も観桜の計画（雨天で中止）があったことが『小右記』に記され、後一条朝長元年間における頼通・彰子の白河遊覧はひと際活発であったことが知られる。

とにかく寛徳二（一〇四〇）年において女院彰子が白河第に転居したことを端に「白河の院」の呼称が定着したと憶測されるのであり、その渡御の直接的な由因は、後一条天皇の崩御（長元九（一〇三三）年四月十七日）に続き、国母彰子の第二子である後朱雀上皇の崩御が寛徳二（一〇四〇）年一月十八日であったからで、その哀しみにくれる彰子の内奥が察せられる。『栄花物語』（卷三十六、根合）には次のように記されている。

女院の御前には、世の中を思しめし嘆きわびさせたまひて、巖のなか求めさせたまひて、白河殿に渡らせたまひぬ。京極殿をば一品宮に奉らせたまひつ。  
(略)

白河殿の秋のけしきいみじうあはれなるに、まして神無月の時雨に、木の葉の散り交ふほどは、涙とどめがたし。主殿の侍従のもとに、大膳大夫範永、古を恋ふる寢覚めやまさるらん聞きもならはぬ峰の嵐に  
いといとあはれに催されて、御前にも人々いみじう思しめさる。

またの年の四月ばかりに、御前の花散り果てて、  
惜しまれし梢の花は散り果てて厭ふ緑の葉のみ残れる  
とうち思しめしたるけしき、いみじうあはれなり。  
(三四五―六頁)

女院彰子は「京極殿」つまり本邸土御門第を孫娘の一品宮章子内親王

(道長三女威子所生)に譲ってまで覚悟の白河への転居であったらしい。<sup>(注26)</sup>

また時雨に木の葉散る秋景は和歌六人党好みであり、そのひとり範永(頼通の家司―『範永集』勅物)は、しばしば白河殿に出入りしていたようで、「主殿の侍従」(『後拾遺集』『範永集』では「侍従の内侍」)のもとへとはいえ、この「古(いにしへ)」を「歌は、主の彰子の悲しみに沈む胸中を慮っての詠歌であり、周りの女房達の高評価の寄ってくることを思うと、歌中の「寢覚め」の語さえも看過できず、『夜の寢覚』の着想に関わる影響をも指摘したくなる位置を占めているといえよう。

ともかく女院彰子の「白河殿」への転居が「白河の院」呼称への端緒を切り拓いたとみられるのは、孝標女作の物語群の一つに「朝倉」があり、白河が同じく隠し据えられた拠点であった訳だが、<sup>(注27)</sup>男主人公の別邸があったにしても「白河の院」との呼称表出には至らない。「寢覚」末尾欠巻部において仮死状態に陥った寢覚の上を隠し据える冷泉院に関わって、その白河にある別業が「白河の院」として呼称浮上することから、『寢覚』の成立時期や想定できる読者対象を鑑みて女院彰子が寛徳二（一〇四〇）年の白河殿への転居以降の事象の反映とみるのが穏当ではないかと思われる。

〈白河〉がこのように『寢覚』末尾欠巻部において女主人公寢覚の上が隠し据えられる地であったことは、〈宇治〉ともども両者が川のほとりの物語であったこと以上にその時空を共有しているとも考えられるし、宇治十帖を橋姫物語(八の宮の大君・中の君)を継ぐ浮舟物語への物語展開相において考えれば、『寢覚』は現存巻五巻末において「夜の寢覚絶ゆる世なくとぞ」としていちおうの閉じ目を経て、再び寢覚の上を襲う危機に直面させる意図は別に考えなければならぬ(このことに関しては次稿で述べらる)、宇治十帖が女主人公を大君↓中の君↓浮舟と次々代えていったのに

対し、寢覚の上は一貫して苦難を受ける立場にあった。しかし男主人公を交えた三角関係の人物構図は、女主人公だけを代える宇治十帖とも重なり、『寢覚』末尾欠巻部はその構図を継続することになる。いまその人物関係を図式化すると次のようになる。

今上帝女二の宮（正妻）

=

○薫（男主人公）

←

浮舟（女主人公）

→

匂宮（恋敵。女二の宮とは異腹の兄妹）

朱雀院女一の宮（正妻）

=

○内大臣（男主人公）

←

寢覚の上（女主人公）

→

冷泉院（恋敵。女一の宮とは兄妹）

図式化した人物関係構図では、浮舟をめぐる三角関係と寢覚の上のそれとが対応関係であることは一目自明で、男主人公（薫・内大臣）にとっては政略結婚等の事情で結ばれた高貴な正妻の他に最愛の次妻を求める（二人妻）行動圏の所為と見做し得よう。<sup>注(28)</sup>

ところが、その内実は薫に当たる内大臣が寢覚の上を隠し据えた訳ではなく、恋敵となる冷泉院の行動であり、しかも浮舟の場合は恋敵の匂宮の愛を受け入れたのに対し、寢覚の上は決して冷泉院を受け入れず拒んだのであった。巻三のことではあるが、寢覚の上の抵抗があったにしても、そこで踏み留まってしまい男女関係に至らなかった冷泉院の自制を「をこがまし」と後悔する思考回路は薫を受け継いでいるということ<sup>注(29)</sup>で、男女ともその心情は図式の対応関係とは異なり錯綜すると言ってよいであろう。しかしながら、二つの物語において隠し据えられた〈宇治〉ないし〈白河〉から女主人公たちは脱出を計ることになり、落ち着く先が〈小野〉ないし〈広沢〉であり、その地で出家することになるのは共通するのである。

#### 四 むすびに代えて

宇治がどちらかと言えば十月（閏九月）の紅葉の季節（宇治十帖の権本・総角巻でも）に遊興が行なわれていたのに対し、白河は三月の桜の景観にその特徴があったといえようが、両者が共に藤原摂関家の別業所在地であった点で、道長・頼通の時代相において常に一定の風景をみせている訳でもなかった。特に頼通時代は道長から摂政を引き継いだ後一条朝寛仁元（一〇七）年から関白職を実弟教通に譲る後冷泉朝治暦三（一〇七）年まで実に半世紀五十年に及ぶ政権掌握の経過の中で、宇治の地も政治的・文化的な変容を遂げていた。頼通は永承七（一〇五）年、宇治の別業の一面を平等院とし、いっけん浄土希求の仏教的聖地と化したかの如くであるが、「宇治殿」頼通の実娘寛子皇后やその女房たちにとって『四条宮下野集』<sup>注(30)</sup>などから窺い知られる宇治は観桜のための遊興地と化していた。

寛徳二（一〇四）年以降の〈白河〉が女院彰子の隠棲地となるに及んで、

頼通の文化発信の拠点となった〈宇治〉を継承したのは他ならぬ皇后寛子であった。祐子内親王家の女房である『夜の寝覚』の作者孝標女は、こうした頼通文化圏に帰属していたはずである。しかし、『夜の寝覚』の〈白河〉設置はそうした帰属の方向性とは異なり、彰子の方をむいての物語創作ではなかったろうか。

彰子・頼通姉弟間に微妙なズレが生ずるのが強引な寛子入内以降のことだと考えている。<sup>注31)</sup>その結果が『更級日記』に孝標女自らの物語についての言及が全くないことへと導かれるはずである。

## 注

- (1) 久保田孝夫「宇治への視座 物語の「場」前史」(関根賢司編『源氏物語 宇治十帖の企て』(おうふう、平成17(2005)年)が「場」としての宇治を仏教・交通・遊興・別業の地の各々の視点からまとめている。また木幡山越えする宇治への険しい道を往還する薫や匂宮にとって「憂路(うぢ)」「憂き路」であったとする指摘が大野晋・丸谷才一『光る源氏の物語下』(中央公論社、平成元(1989)年)にある。
- (2) 「さ筵に衣片敷きこよひもや我を待つらむ宇治の橋姫」(巻十四、恋四、よみ人しらず、六八九)、「忘らるる身を宇治橋のなか絶えて人もかよはぬ年ぞ経にける」(巻十五、恋五、よみ人しらず、八二五)
- (3) なぜ宇治なのかの問いに対し、土方洋一『源氏物語のテキスト生成論』(笠間書院、平成12(2000)年)「宇治の物語の始動」は、『伊勢物語』『大和物語』などの姉妹構図の逸話や和歌的言語エネルギーの連絡する運動性が出離と疎外の〈宇治〉をたぐり寄せてくると述べる。しかし、物語の内部エネルギーだけでは匂宮三帖の繰り返された挫折(紅梅巻における匂宮の宮の姫君への執着や竹河巻における姉妹構図等)で明らかかなように宇治十帖は始動前進で

きない。

- (4) 『花鳥余情』の故八条左大臣源雅信の未亡人からの買い取り説は誤りである。
- (5) 意訳に関しては倉本一宏の現代語訳(講談社学術文庫)を参照した。なお念を押すが、意図的に宇治遊興だけを誇張するかのように掲出した訳ではない。
- (6) 『小右記』治安三(1033)年八月十一日条に「今日、禅室宇治殿ニ於テハ講行ハル。隨身ハ少僧都懷寿、定基、永昭、已講教円。法花経・四卷経ヲ供養セラル。此ノ処ニ於テ年来漁獵ス。其ノ罪ヲ懺インガ為ナリト云々」とあり、宇治殿で法華八講が四日間盛大に行なわれた。『小右記』同月十四日条には「昨日、作文・管弦等有リ」とも記される。これが記録上では道長による宇治での催事の最後となるか。なお『栄花物語』には年時が異なるが、巻十九「御裳着」(2350~1頁)に本仏事の記述がある。
- (7) 『本朝麗藻』には道長(『本朝麗藻簡注』勉誠社、平成5(1993)年、八七、行成(八八)と源孝道(八九)の詩作が載る。ともに宇治の秀逸な景と主客の交りを詠む。また並記される中書王具平親王の「偷見左相府宇治作有感」(九〇)は、道長の文事による王道政治を暗に認めたものか。
- (8) 久下『源氏物語』成立の真相・序―紫式部、具平親王家初出仕説の波紋―(『学苑』94、平成30(2018)年8月)及び「末摘花巻の成立とその波紋」(『学苑』99、平成31(2019)年1月)参照。
- (9) 道長が伊周「秋日到入唐寂照上人旧房」(二四八)に和し、さらに道長の詩に和した伊周「余近曾有下到寂照上人旧房之作。左丞相尊閣忝賜高和。聊次本韻、敬以答谢。」(二四九)となる。
- (10) 寛弘四(1017)年から寛弘六(1019)年にかけては彰子の懐妊(祈願を含む)、出産(敦成・敦良親王)の時期で宇治遊覧はひかえられたのであろう。
- (11) 久下「浮舟設定と入水前後」(横井孝・久下編『知の遺産シリーズ⑤宇治十帖の新世界』武蔵野書院、平成30(2018)年)
- (12) 『新編全集』の頭注には「このあたり、源氏と夕顔の逢瀬にも類似する点が

注意される。」(⑥九二頁)とか「源氏が幼びた紫の上を引き取り、藤壺の形代として理想的に育成しようとしたのと同趣ともいえよう。」(⑥九九頁)等、近辺に同趣の注が散見する。

(13) 浮舟巻に大内記の匂宮への報告に「女をなむ隠し握ゑさせたまへる、けしうはあらず思す人なるべし」(⑥一一四頁)ともある。

(14) 六条院に身を置かかつての夕顔の侍女右近は玉鬘を導き入れ、浮舟の侍女右近は薫と誤認して匂宮を寝所に導く。物語は右近という同一呼称の侍女を投入している。なお浮舟付きの右近は中の君の侍女右近と同一人物かそれとも別人なのかについて議論があるが、この問題に言及した最近の論考に横井孝「後篇の物語の構造」(前掲『知の遺産シリーズ⑤宇治十帖の新世界』)がある。

(15) ことさら「宇治」への道行き当日の日付が明記されているのは、九月十三夜の月が八月十五夜に次ぐ名月との認識があったからであろう。瓦井裕子「九月十三夜詠の誕生―端緒としての『源氏物語』撰取」(『国語国文』983、平成28(2016)年7月)では『源氏物語』の例として主に夕霧巻を挙げて論述している。夕霧が落葉の宮に迫る場面で柏木を偲ぶ月であったように、薫にとっては亡き大君の面影を慕う月となっている。

(16) 末尾欠巻部を含めての『夜の寝覚』の成立時期を、稲賀敬二「康平三年『寝覚』成立・仮説」(『源氏物語の研究―物語流通機構論―』笠間書院、平成5(1993)年)に従って、康平三(1060)年頃と考えて大過あるまい。

(17) 久下「『夜の寝覚』の世界」(『王朝物語文学の研究』武蔵野書院、平成24(2012)年)は、〈広沢〉が和歌六人党などの時代背景の中で浮上する土地柄であることを述べた。

(18) 倉田実「文学史上の宇治十帖」(前掲『知の遺産シリーズ⑤宇治十帖の新世界』)は、「宗教性において、宇治・吉野・嵯峨は交換可能」とし、「宇治が宗教の地として物語の舞台となったことが、以後の物語を決定づけていた」と

述べている。孝標女の物語群が中世王朝物語などと一括りにされることが問題ともなる。また宇治十帖について同氏「あそびと文化」(前掲『源氏物語宇治十帖の企て』)では「宇治の地が仏道と「あそび」の空間であることよって八の宮や大い君の物語が展開していた」と述べていた。では浮舟に託つての〈宇治〉という空間はどうであるのかを明らかにするのが本稿の主旨となる。

(19) 後掲する新出古筆切を紹介検討する仁平道明「『夜の寝覚』末尾欠巻部断簡考―架蔵伝後光厳院筆切を中心に―」(『物語論考』武蔵野書院、平成21(2009)年)をはじめ、その仁平氏の古筆切が『寝覚』の古筆切であることを証明できるまた新たな古筆切を紹介する横井孝「『夜の寝覚』末尾欠巻部断簡の出現―伝後光厳院筆切の正体―」(横井孝・久下編『考えるシリーズII 知の挑戦①王朝文学の古筆切を考える―残欠の映発』武蔵野書院、平成26(2014)年)及び久下「挑発する『寝覚』『菓守』の古筆資料―絡み合う物語―」(『源氏物語の記憶―時代との交差』武蔵野書院、平成29(2017)年)等。なお実践女子大学蔵となる横井氏前掲論考における最も近時の新出切は、全国紙で報道(平成26(2014)年5月27日「読売新聞」など)され、またNHKでも放映された。

(20) 『後百番歌合』『風葉和歌集』の引用は、樋口芳麻呂校注『王朝物語秀歌選(上)(下)』(岩波文庫)に拠る。なお傍線傍点は久下の所為である。

(21) 仁平氏の前掲論考では従来の説を検討し、「あながちにのがれ出で」の解釈を再考すべき由を説いている。首肯される。

(22) 母寝覚の上が死んだものと思ひ三位中将真砂(極官は「右大将」)が北山に籠った事を知り得る資料は『後百番歌合』(八番右、二二六。十七番右、一三三四)『風葉集』(巻九、哀傷、六一三。巻十七、雑二、二二七〇)である。

(23) 『後百番歌合』十三番右(二二六)・十四番右(二二八)及び田中登蔵「伝慈円筆寝覚物語切」や大和文華館蔵『寝覚物語絵巻』詞書等によって冷泉院女三の宮も「しらかはの院」にしばらく居住していたらしく、またおそら

く同時期に寝覚の上も滞在していたと思われ、前掲注(19)の横井氏紹介の実践女子大切には「なつかしくうちかたらひかゝる人もおほせさらましはとおもふにも」とあり、二人の間には接見交流があったようだ。

(24) 本稿と同じくなぜ白河なのかの問いを立てて論及する横井孝『源氏物語の風景』(武蔵野書院、平成25(二〇一三)年)、『寝覚』の風景二「しらかはの院」の掲出資料を参考にした。『小右記』『小記目録』は大日本古記録、『日本紀略』『扶桑略記』は国史大系に拠る。

(25) 円融朝の天禄三(九三二)年閏二月に白河殿で開催された作文会における源順の序文(『本朝文粹』卷十「後二月遊白河院」同賦「花影泛春池」応教)に「然レドモ猶ホ都人ノ士女ノ花ヲ論ズル者ハ、多クハ白河院ヲ以テ第一ト為ス」とあり、時代を経て桜の名所たる景勝地である。なお今浜通隆『新典社注釈叢書25本朝麗藻全注釈四』(新典社、平成5(一九九三)年)は、寛弘二(一〇〇五)年三月二十九日に開催された道長邸作文会(詩題「花落春帰路」)の場が白河殿であったと想定する。

頼通・彰子時代でも桜の名所たる由縁を歌集から数例挙げておく。

○『公任集』(三七)

白川にて

故郷の花をもおもふ山桜ちるを見捨て帰りがたさよ

○『弁乳母集』(一一)

白河殿のはなの水にちるを

白川のちかきわたりにちるはなは木ずゑにかゝる浪かとぞみる

○『後拾遺集』(卷一、春上、一一九)

高倉の一宮(祐子内親王久下注)の女房、花見に白河に

まかれりけるに、よみ侍りける

伊賀少将

なにごとを春のかたみに思はまし今日白河の花見ざりせば

なお公任は北白河に別荘をもっていたため、その長女(定頼の妹)が教室室

となった長和元(三三)年四月二十七日(『御堂関白記』『小右記』)以降、教通がたびたび白河を訪れるのは、この公任の別荘ではなかったかと思量する。

(26) 頼通の実娘寛子が永承五(一一五〇)年後冷泉天皇に入内するが、その翌年立后するに際し、中宮章子内親王は「皇后」となるべきところ「中宮」にとどまった。これは、頼通の思惑とは異なるが、妥協したとみる。

(27) 久下「挑発する『寝覚』『菓守』の古筆資料―絡み合う物語―」(前掲)参照。

(28) 宮下雅恵「(女)のカタログ―女たちの共感装置としての『夜の寝覚』―」(『中古文学』96、平成27(二〇一五)年)。なお(二人妻)の典型として『寝覚』の男主人公が「宮(女一)の宮―久下注)の御方に二夜、こなた(寝覚の上)に一夜」(巻五、五一―頁)とするのは、夕霧が「三条殿と、夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住みたまひける」(匂兵部卿卷、⑤二〇頁)と雲居雁と落葉の宮とを遇したのに対応するか。

(29) 仁平道明「などしつるをこがましざぞ―夜の寝覚の帝とそのゆくえ―」(前掲『物語論考』)

(30) 和田律子「宇治殿につどう女房たち―宇治川を渡る四条宮下野―」(久下編『考えるシリーズ⑤王朝の歌人たちを考える―交遊の空間』武蔵野書院、平成25(二〇一三)年)。  
(31) 久下「紫式部から伊勢大輔へ―彰子サロンの文化的継承―」(『学苑』97、平成30(二〇一八)年1月)もそうした視座からの論考である。

(くげ ひろとし 本学名誉教授)